

ベートーヴェン
第九

熊本市大江2丁目7番1号
財団法人 熊本県立劇場
電話(096)363-2233(代表)

昭和60年12月25日(水)午後6時30分
熊本県立劇場コンサートホール
主催：熊本県・県民第九の会・県文化協会



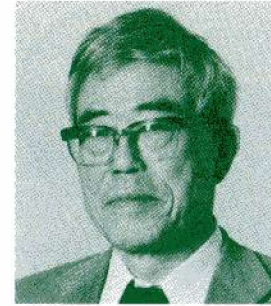
熊本県知事
細川 護 熙

今、私たちは、極めて大きくそして急速な変化の時代を迎え、何をなすべきかを考え、実行すべきかを「明日へのシナリオ」として提唱しました。

郷土くまもと いにしえの古からの文化の歴史と伝統や県民意識の変化を踏まえ、個性を活かした新しい文化の創造に積極的に取り組んではやくも一年が過ぎました。

顧みますと、この秋は文化庁芸術祭初の地方公演、日本文化デザイン会議と日本文化にとっても大切な二つのビッグイベントがこの熊本で開かれました。文化庁芸術祭が今年から初めて地方で行われることになり、熊本が第一回目の開催地に選ばれましたが、熊本らしさを生かした新しい文化の創造をめざそうとしている熊本にとってよきスタートの年になりました。

この記念すべき年の最後を飾って、第四回のコンサートを開催されますことは、まことに意義深いことであり、県民にとっても大きな喜びであります。また、県民の誇りとする音楽専用ホールは、施設にふさわしい文化創造に芸術鑑賞に、そして豊かな文化生活の充足の場として活用されています。芸術祭のメインステージとなった県立劇場で、これまで県立劇場の誕生と共に歩き続けている熊本生れの県民第九の会が、聴衆と一体となったまさに熊本生れの音楽を生み出し、県民の明日への豊かな文化の源となりますよう期待し、今日の大演奏会のご成功を祈念し、お祝いの言葉と致します。



熊本県文化協会会長
岩下 雄 二

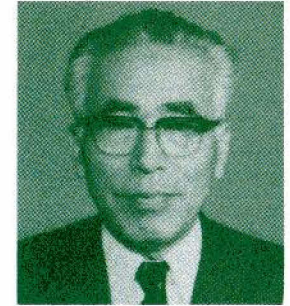
「県民第九の会」の「第九」演奏も今年はまだ第四回目になる。

なぜ、大晦日の晩になると「第九」を聞かなくてはならないようなことになったのかは知らないが、多分それは元日になると屠蘇を飲み、数の子を食べることになっているのと同じようなものなんだろうと思っている。

ただし、その慣行がベートーヴェン以前はなかったことは確かだ。

もう一つ確かなことは、熊本の「県民第九の会」が始まったのは、県立劇場が建てからのことだということだ。

県立劇場のコンサートホールで、県民が演奏する「第九」を聴くことは、もう、われわれの年末の大きな喜びの一つになった。それを聴かせてくれる人たちに心からお礼を申し上げる。



県民第九の会実行委員長
有馬 俊 一

歳末ご多忙な折よくおいで下さいました。おかげ様で第九演奏会も第四回を迎え、年末恒例の行事として定着して参りました。

今回は指揮にチェコスロヴァキアよりフランティシェツク・ワイナル氏を、独唱者に三縄みどり、妻鳥純子、伊達英二、中村邦男の四氏をお迎えして開催致します。ワイナル氏は、この九月よりプラハ国立歌劇場首席指揮者に就任された実力者で、毎年の「プラハの春」では最後を飾る第九を指揮なさっておりますので、今迄とは趣の違う第九を味わって戴けるかと楽しみにしております。ソプラノの三縄みどりさんは熊本出身で、他の三氏と同じように、有望な中堅声楽家として中央で活躍中です。オーケストラは今年創立20年の熊本交響楽団、合唱は県民第九の会合唱団です。

昨年全国で行われた第九演奏会は160回に及ぶそうので、今年はその水準が高いと評価される第九にしたいと、九月以来休日をつぶして練習して参りました。ワイナル氏の指揮に応え、熊本の音楽ファンへの最高の贈り物にしたいと頑張っておりました。しかし何分にも専門の音楽家の集まりではありませんから、必ずしもご満足いただける演奏にはならないかと心配致しております。未熟なところはご寛容下さいまして、ごゆっくりご鑑賞下さい。歓喜の調べを高らかに、ホール一杯に響かせましょう。

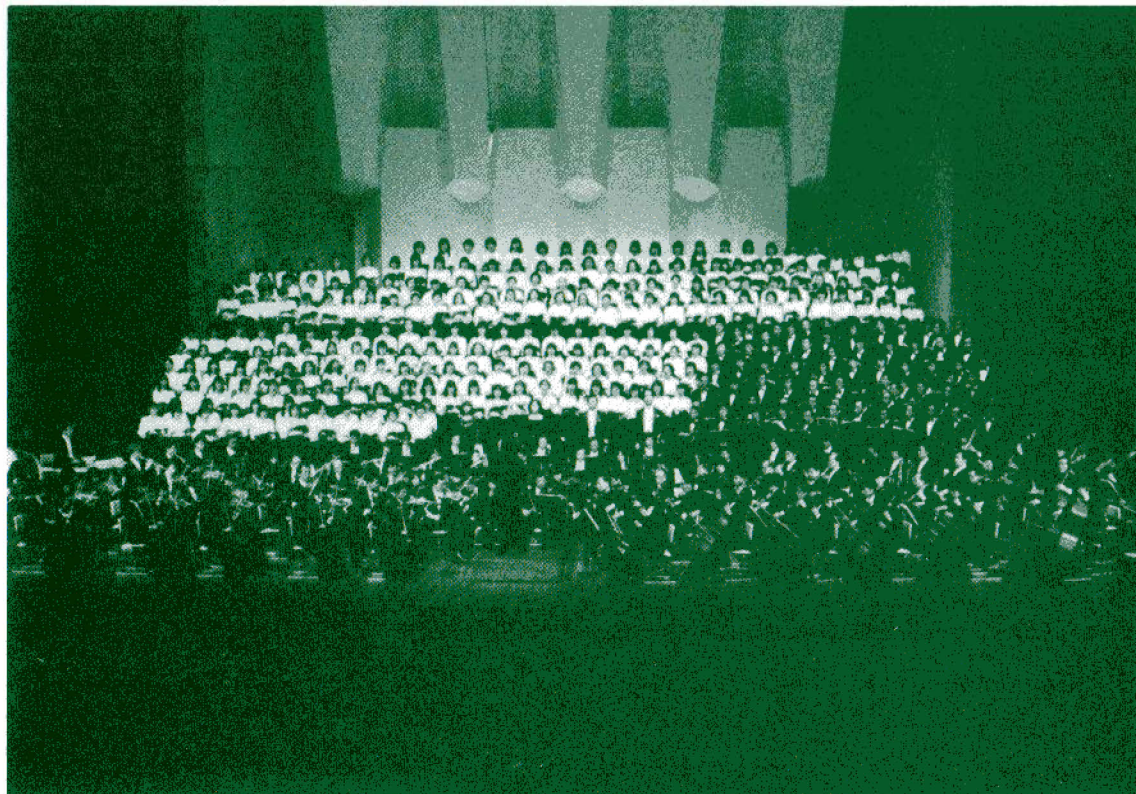
出 演
PERFORMANCE

指 揮 フランティシェック・ワイナール
Frantisek Vajnar

独 唱 ソプラノ 三 繩 みどり
アルト 妻 鳥 純 子
テノール 伊 達 英 二
バリトン 中 村 邦 男

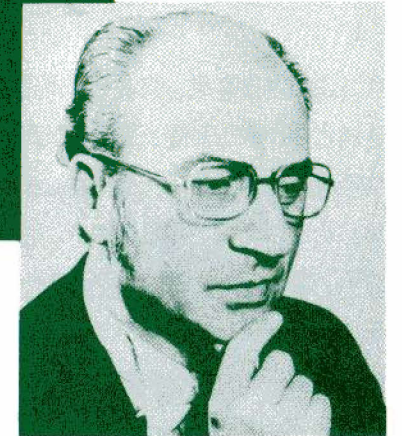
合 唱 県民第九の会合唱団
(合唱指揮・林原隆治)

管弦楽 熊本交響楽団



昭和59年12月27日〈県民第九の会演奏会（指揮＝山岡重信）〉から

指揮者のプロフィール
CONDUCTOR;PROFILE



指 揮 フランティシェック・ワイナール
(Frantisek Vajnar)

彼はブラハ音楽院のヴァイオリン科での勉強を終え、ブラハ軍隊オペラで指揮者として活動したあと、指揮者として本格的な活動を始めた。1955年にブラハの音楽劇場に移り、後にオストウヴァ国立歌劇場に所属する。1962年から1974年までUsti nad Labemの国立歌劇場首席を務めた。その時彼は基本的なオペラのレパートリーや現代作家によるたくさんのオペラを研究し、準備し、プロデュースした。1974年に彼はブラハ国立歌劇場の指揮者として仕事をした。

1975年リオ・デ・ジャネイロの国際指揮者コンクールで第4位に輝き、名誉賞も獲得した。1976年にはじめてチェコ・フィルの指揮をする。そして、彼のデビューが成功した為、コンサートやレコーディングでのチェコ・フィルとの共演が続くことになった。彼は室内楽の Collegium Musicum Pragense の監督として活躍し、ザルツブルグ音楽祭、ウィーン音楽祭などに参加し、数多くのツ

アーも行った。1974年以来ブラハ・アカデミーの指揮科で教授を務めている。

過去30年の指揮者としての活動中、80あまりのオペラ作品を、何百ものオーケストラや室内楽の作品を研究し、準備した。また、Supraphon, Panton EMI のレコードをチェコ・フィル、ブラハ交響楽団、ブラハ室内管弦楽団、ブラハ国立劇場、ブルノのオペラ劇場などとの共演で作成した。彼の指揮は、イタリア、スイス、フランス、オーストリア、ユーゴスラヴィア、ポーランド、ハンガリー、東独、西独、ノルウェイ、デンマーク、ソヴィエト、ブラジルなど世界各国の聴衆に絶賛された。

1980年にチェコ政府より名誉ある称号の Artist of Merit を贈られた。

1979年以来、チェコスロヴァキア放送交響楽団の首席指揮者を務めていたが、本年1985年9月より、ズデニェツク・コシュラーに替ってブラハ国立歌劇場の首席指揮者に就任することになった。

三縄みどり(みなわ・みどり)
ソプラノ



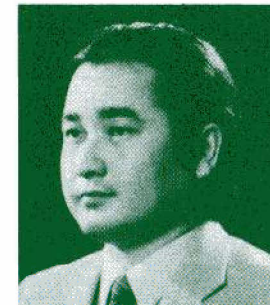
東京芸術大学卒業。同大学院修了。
木村宏子、柴田陸、足田生次郎に師事。
1975年、芸大オペラ「ラ・ボエーム」ムゼッタをはじめとして、「夕鶴」のつう、「フィガロの結婚」(パルコオペラ)のスザンナ、その他、「カルメン」のミカエラ、「魔笛」のパパゲーナ等をレパートリーとする他、コンサートでも、ヴィヴァルディ「グローリア」、フォーレ「レクイエム」、モーツァルト「c-mollミサ」「レクイエム」、ブルックナー「テ・デウム」「カルミナブラーナ」、ハイドン「ネルソンミサ」、シューベルト「ミサ第5番」、ベートーヴェン「第九交響曲」等で活躍。
二期会会員。

妻鳥純子(めんどり・すみこ)
アルト



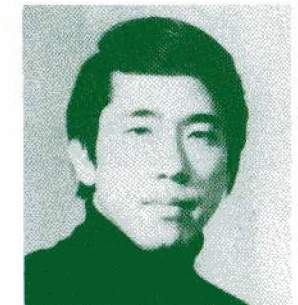
東京芸術大学卒業。同大学院修了。
ロドルフォ・リッチ、中山梯一に師事。
1973年、第42回音楽コンクール第3位入賞。
74年度海外国際コンクール派遣代表者決定審査会で特別表彰を受けた。
75年7月渡独、ミュンヘン州立音楽大学においてヘルタ・テツパー女史、フランツ・ミクサ氏に師事。'77年3月帰国。'78、'79年と、文化庁の移動芸術祭公演で「カルメン」のメルセデスを演じ、'80年5月二期会主催による「カルメン」にも出演する他、'84年「リゴレット」にジョヴァンナで出演。
二期会会員。

伊達英二(だて・えいじ)
テノール



国立音楽大学卒業。中村義春、久岡昇、田口興輔に師事。
二期会オペラスタジオ研究生の時、昭和55年度文化庁国内研修員に選ばれる。
すでに多くのコンサートに出演し経験を重ねており、1981年秋に小沢征爾指揮の新日フィル定期演奏会「サロメ」(R.シュトラウス)にはユダヤ人を歌い、又、オペラでも同年7月の「マイスタージンガ」(ワーグナー)で徒弟の一人に選ばれ、1983年、藤原歌劇団「マハゴニー市の興亡」のジムを好演。1984年10月「椿姫」(ヴェルディ)のガストンを歌い、今後の活躍が期待されている。
二期会準会員。

中村邦男(なかむら・くにお)
バリトン

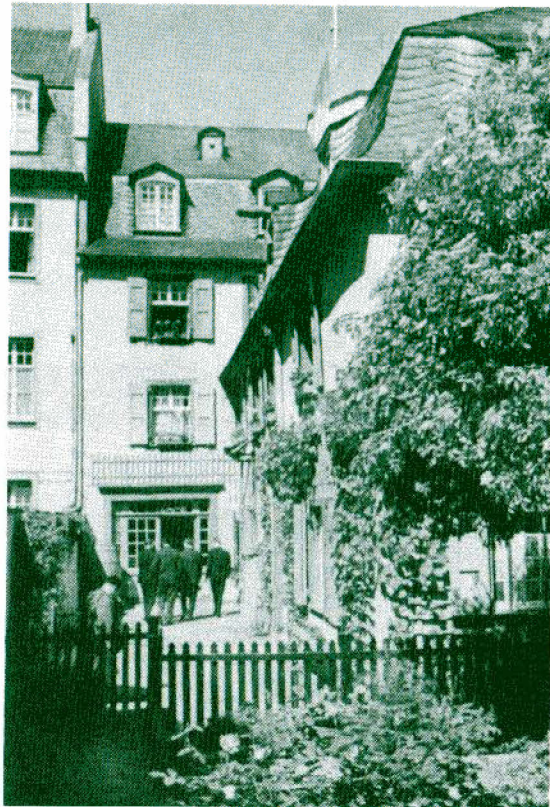


国立音楽大学卒業。同大学院修了。オペラ研究所第二期生修了。
1980年秋から一年間、文化庁派遣在外研修員としてウィーンに留学。
中山梯一、波多野靖祐、荘智世恵、リリー・コーラーに師事。
国立音大オペラ「ドン・ジョヴァンニ」、「フィガロの結婚」のタイトルロールを歌い、「コシ・ファン・トゥッテ」のアルフォンソ、「ナクソス島のアイアドネ」の音楽教師に出演。1982年には二期会の「ドン・ジョヴァンニ」のマゼットを歌うほか、多くの宗教曲、ベートーヴェンの「第九」などコンサートでも活躍している。
二期会会員。

1. レオノーレ序曲 第3番 作品72
ベートーヴェン

2. 交響曲第9番二短調「合唱付き」作品125
ベートーヴェン

- 第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco
maestoso
第2楽章 Molto vivace
第3楽章 Adagio molto e cantabile
第4楽章 Presto



ベートーヴェンの生家(ボン)

ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた“第九”の演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様をラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げると、窓辺に外へ向ってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子を思い浮かべると、実に壮観で感動的であったに違いない。同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持と愛する気持が手に取るようにわかる。

■シラー—〈歓喜に寄す〉

対訳—大宮真琴

バリトン独唱

O Freunde, nicht diese Töne / Sondern
lasst uns angenehmere anstimmen, und
freudenvollere.

おお、友よ、この調べではなく、
さらに快い、さらに歓びに満ちた調べを
ともに歌おう！

バリトン独唱・合唱

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium.
Wir betreten feuer-trunken,
Himmlische, dein Heiligtum /
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

①歓びよ、神々のうるわしい輝きよ！
楽園の娘らよ！
われらみな、感動に酔い、
天の高みの神殿に踏み入ろう！
②この世に厳しく引き離された者らを、
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。
御身の優しい翼の憩うところ、
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

四重唱・合唱

Wemder grosse Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein /
Ja, wer aubh nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund /
Uud wer's nie gekonnt der stehle
Weinend such aus diesem Bund /

③大いなる天の賜物をうけた者らよ、
真空の友情を勝ち得た者らよ、
女の優しい愛を得た者らよ、
歓びの歌を、ともに歌え！
④しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも
地上の友と呼べる者を持つことができるならば！
だが、それさえ持つことのできなかつた者は、
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい！

四重唱・合唱

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

⑤すべてこの世に在るものら、
自然の胸から歓びを飲み、
すべての善人も、すべての悪人も、
歓びの薔薇の小径を行く。
⑥歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、
天使ケルビムは、神の御前に立つ。

テノール独唱・男声合唱

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

⑦歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、
⑧同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

合 唱

Seid umschlungen Mill : onen /
Diesen Kuss der ganzen Welt /
Brüder über'm Sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen,
Ihr stürzt nieder, Millionen ?
Ahnest du den Schöpfer, Welt ?
Such' ihn über'm Sternenzelt /
Über Sternen muss er wohnen.

⑨たがいに手を取り合おう、億万の人々よ！
この口づけを、全世界にあたえよう！
同朋（はらから）よ、星のかなたには、
愛する一人の御父が住み給うのだ。
⑩ひれ伏して祈るか？ 億万の人々よ。
創り主を心に感ずるか？ 世界の民よ。
星空のかなたに、主をさがし求めよう！
星たちのうえに、主は住み給うのだ！

1. レオノーレ序曲 第3番 作品72
ベートーヴェン

「フィデリオ」はベートーヴェンの完成した唯一のオペラである。ベートーヴェンは1805年のスケッチに始まる第一回の公演のあと、公演のたびに改訂を行い、1814年最終決定版が出るまでに、実に9年もの時を費やす程の入念さをもって推敲を重ねた。その結果、この作品はオペラ史上もっとも充実した内容が与えられ、遠くワーグナーの楽劇にいたるまで19世紀の音楽史全体に及ぼした影響は深く大きいものがある。単なる筋書を超えて「人間解放」という高い理念を具現するものとなり、ベートーヴェンの理想主義芸術を担うもっとも重要な作品となった。

物語は、スペイン貴族フロレスタンは国立監獄の獄長ピッツァ口の私怨によって地下牢に投獄されている。夫の大事を知った妻レオノーレは男装し、フィデリオの名で牢番の下僕に雇われ、夫を救出する。というのが大筋である。

ベートーヴェンは、この「フィデリオ」のために、改訂のたびに新しく序曲を書き、都合4曲の序曲を書いた。シントラーによると、その順序は、1805年オペラ初演の際、今日でいう「レオノーレ第2番」が使われ、再演のたびに「レオノーレ第3番」、「フィデリオ序曲」と作られ、遺作として「レオノーレ第1番」があるとされている。

レオノーレ序曲第3番は、1806年の改訂上演の際に作曲されたもので、第2番に比べると、形式的にも整備され、本格的なソナタ形式をとっている。その結果、オペラの序曲という性格を超えて、一篇の完全な交響詩的性格を具えることになった。

古今の序曲中の名曲として単独で演奏されることはもちろん、「フィデリオ」全曲上演にあっても、序曲は「フィデリオ」序曲に譲るものの、第二幕第二場の前に「レオノーレ序曲」第3番が演奏されることが習慣となっている。

曲はアダージョの序奏が *ff* のトゥツティーで開始される。木管と弦とが音階的に下降し、やがて、フロレスタンの第二幕のアリア「人の世の美しき春にも」のテーマがクラリネットとファゴットによって美しく歌い出される。

アレグロの主部に入ると、ただちに、第1主題が *pp* で第1ヴァイオリンとチェロで呈示される。この主題は全曲を通じて縦横に活用される。第2主題はフロレスタンのアリアをもとにしたもので、フルートと第1ヴァイオリンで静かに現われる。オペラの中で大臣の到着を告げるトランペットの信号が舞台裏から二度にわたって聞える。コーダはプレストで文字通り、息を継ぐ間もなく、壮大な終末へと導かれてゆく。

2. 交響曲第9番 二短調「合唱付き」作品125
ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ポンのフィッシェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいだいて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大な精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルトナートア劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

【第一楽章】 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度（第三音がない）の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃（ほうはい）として湧きおこる巨大な塊のごとく蒼然（しょうぜん）たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題の出現を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異って、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは、再現部における第1主題への壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワーグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びを勝ち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

【第二楽章】 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考えうる限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果たすことにもなるのである。

ワーグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶酔や麻酔へと駆りたてられるからである……」と言っている。

【第三楽章】 Adagio molto e cantabile

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するよ

うな明るく美しい第2主題、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワーグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱（ゆううつ）な感覚へと溶けさせて行くことか、思い出がつとに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる…」と述べている。

【第四楽章】 Presto

第1呈示部—まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歓ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返しながら全合奏に至る。

第2呈示部—この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌い始める。そして男声合唱が、力強く、力強く歌いかわる。

再現部—やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組合わされて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中のひとつのクライマックスを形づくる。

コーダ—曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストロとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「県民第九の会」実行委員会

(50音順)

実行委員長	有馬俊一	藤枝昭俊
	冲津正巳	三浦洋一
	蔵岡隆	本山洋
	下田幸城	森真一
	黒葛原潔	森義臣
	林原隆治	山崎崇伸

熊本交響楽団

KUMAMOTO SYMPHONY ORCHESTRA

〈コンサートマスター〉

広瀬 大喜

〈1stヴァイオリン〉

阿波 和江
大塚 操
岡田 浩孝
木村 宣子
清永 健介
近藤 倫代
柴谷 淳一
鈴木 伸子
鈴木 洋子
高木 範貢
角田 整保
鶴 和美
中尾 順二
長坂 浩子
萩原 由美
東 真知子
広瀬 大喜
藤本 佳澄
森川 孝之
吉 永 誠 吾

〈2ndヴァイオリン〉

生野 治穂
池辺 敏一
上田 忠幸
岡 純子
木崎 珠美
草野 政夫
桑原 敦子
小柳 敦子
高木 信雄
田上 るみ子
中尾 麻美子
中野 真由美
野田 和子

花川 真一
林 恭子
原 知子
平井 隆博
前田 くみ子
松崎 浩二
宮崎 ゆかり
宮本 吉辰
本山 洋
山崎 崇伸
山本 佳代子
横手 とし子

〈ヴィオラ〉

荒木 拓実
牛島 啓子
太田 由美子
緒方 肇
清元 晃
国府 慶作
徳永 義治
西 和恵
野尻 晃一
藤沢 尚子
本多 智子
松野 多恵
丸野 真司
吉岡 英子
吉 田 美智子

〈チェロ〉

安達 信一
石垣 博志
井石 哲也
内田 園子
緒方 佳幸
片山 玲子
木葉 祐貴
土野 優

高浜 秀光
長尾 和治
長坂 輝喜
林 英明
福永 包憲
本田 義信
水原 真純

〈コントラバス〉

尾崎 恵
古泉 俊彦
国米 稔
坂田 英津子
坂田 拓司
竹内 尚志
津曲 肇
平川 和秀
古沢 尚子
水谷 真理子
山口 和子

〈フルート・ピッコロ〉

緒方 宏明
木村 邦子
後藤 多絵子
佐藤 英一
柴田 芳江

〈オーボエ〉

入江 和也
片岡 久哉
辰野 裕昭
中村 美春
宮本 千草

〈クラリネット〉

黒木 健次
高野 栄次
田中 久美子

平山 嗣佳子

〈ファゴット・ コントラファゴット〉

小田 穂積
黒田 孔太郎
高木 群之
蓮 沼 昇

〈ホルン〉

上村 久直
遠藤 厚男
高橋 毅行
田畑 博行
黒葛原 潔
安松 真司
山口 亮二

〈トランペット〉

市原 彰
岩井 宏二郎
豊田 恭司
堀江 幸司

〈トロンボーン〉

辻田 清次
鍋島 靖夫
米村 宏

〈パーカッション〉

後藤 智子
白尾 友宏
俵 聖香
西村 浩古

Beethoven's Portraits

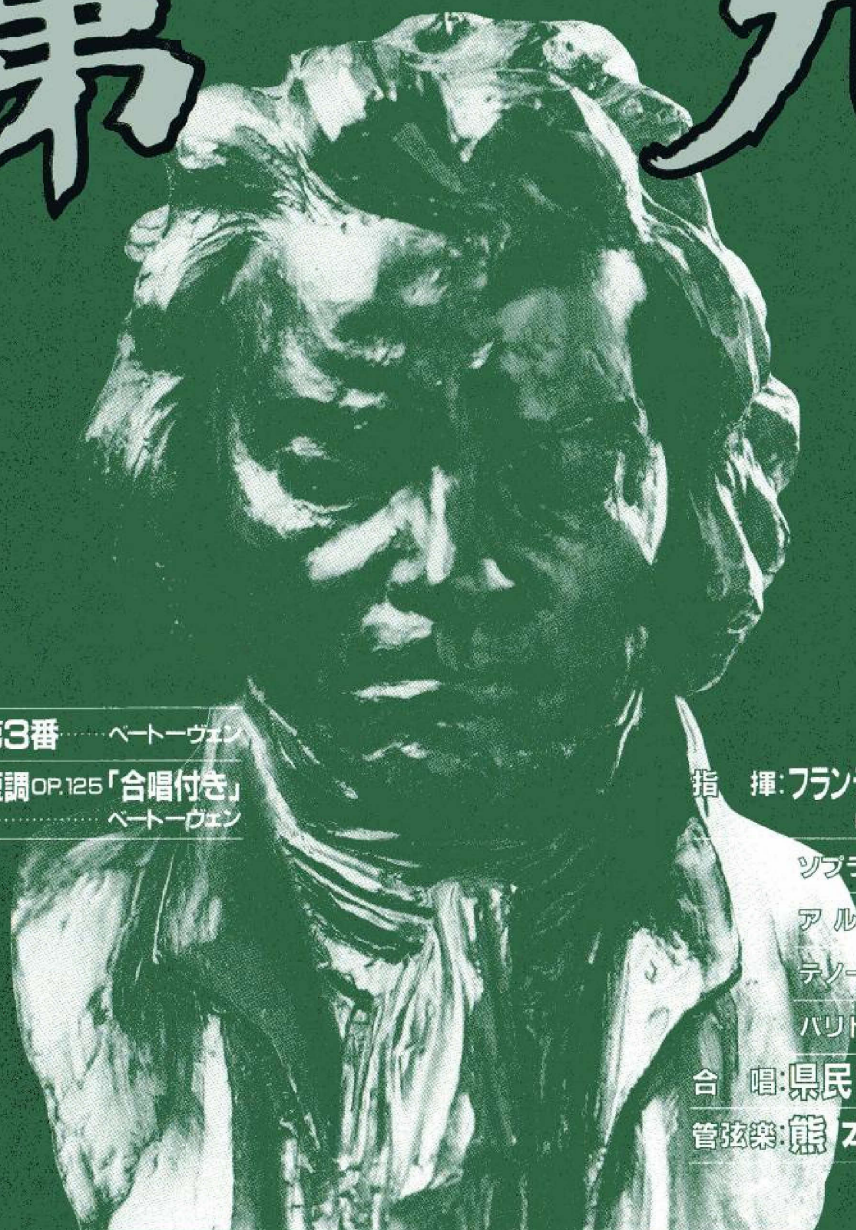


ベートーヴェン

1818/19年、フェルディナント・シモン原画によるエドワード・アイヘンスの銅版画。

ベートーヴェン

第九



曲目

レオノーレ序曲第3番……ベートーヴェン

交響曲第9番二短調OP.125「合唱付き」
……………ベートーヴェン

指揮: フランティシェック・ワイナール
Frantisek Vajnar

ソプラノ: 三縄 みどり

アルト: 妻鳥 純子

テノール: 伊達 英二

バリトン: 山村 民也

合唱: 県民第九の会合唱団

管弦楽: 熊本交響楽団

12/25(水)午後6時30分開演
熊本県立劇場コンサートホール

■主催/熊本県・県民第九の会・熊本県文化協会

■入場料/S(指定席)2,500円・A(自由席1・2階)2,000円・B(自由席3階)1,500円

■入場券は、11月20日より県立劇場および市内各プレイガイドにて発売します。

■お問い合わせ先/熊本県立劇場事業課 ☎096(363)2233・県民第九の会事務局 ☎096(381)1939